

琉球大学学術リポジトリ

アメリカ碑文の研究 ―異文化理解のために― 研究ノート(1)

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2009-12-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 兼本, 円, Kanemoto, Madoka メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002005130

アメリカ碑文の研究——異文化理解のために 研究ノート（1）（注）

兼本 円

0. 研究目的

異文化コミュニケーション研究・教育には自身の文化と異文化を学ぶことが重要になることはいうまでもない。研究にせよ教育にせよ異文化を学ぶ方法は実際のコミュニケーションデータから学べとする態度が主流である。その代表的研究の1つに Barnlund による日米の自己開示の比較研究がある（1982）。当然この種の研究姿勢はこれからも続けられるべきだが、ここでは、少々別の方法を取ることにする。研究と教育のデータを対人間コミュニケーションに求めるのではなく、物理的「物」（tangible objects）に視点をおき異文化のコミュニケーションを考察する。ここで言う「異文化」とはアメリカ文化を意味する。「物」とは碑文である。

1. 碑文の対物学的価値

ここで取り扱うアメリカの碑文は考古学的または歴史学的なものとしてではなく、コミュニケーション的機能から研究されるものである。正確には対物学的視点から碑文を捉える。先ずここで「対物学的」とは如何なるものか定義する。コミュニケーション研究でいう「対物学」とはコミュニケーションと物の関わりを研究するものである。「物」の卑近な例として腕時計を挙げることができる。話者が腕時計を身に付けていない場合には見知らぬ相手に時間を尋ねることは普通にあるわけだが、時計を身に付けていて尋ねることは特殊な場合を除けば可能ではない。逆説的な例で考える。知人のアメリカ人秘書のケース

である。独身女性である彼女は有能な秘書であるが、一人で外出する際には職業柄必需品とされる腕時計なしで行く。理由は素敵な男性に時間を尋ねやすいからだという。この例は彼女が時計の対物学的意味を感得していることを物語っている。

家具や調度品等も対物学的に捉らえることができる。対話者が親しい会話に従事するためには椅子は不可欠なコミュニケーション・ツールとなる。それはお互いの立ち話では距離が公的になりがちで話も円滑に進まないが、座する場合にはお互いが椅子を引き合い、瞬時に個人的な距離を取り入れて話が弾むことになるからだ。この距離の接近が時期尚早の感がするのならば、飲み物を提供することで緩和される。また、部屋の中にある調度品の評価等の話をして後に個人的な内容の話に移ることも可能である。この様に日常を観察すると人間のコミュニケーション行為が以下に「物」に助けられているかがわかる。

本研究は対物学的視点から碑文を捉えて、碑文とアメリカ人のコミュニケーションの関係を考察し、それを通してアメリカ文化理解を試みる。

1.1. rubbing という趣味

rubbing とは動詞 rub (擦る) から来ることばである。墓石に刻まれた碑文とシンボルを紙もしくは布で覆い、その上からチョークやクレヨンで擦り、擦り写すことをいう。この rubbing はアメリカでは定着した一つの趣味として位置づけられている。さらに、ウェブサイト <http://www.familytreemagazine.com/articles/oct00/rubbing.html> を調べると、この rubbing の作品が "a great conversation piece" (会話の好材料) とされていることが分かる (rubbing の作成過程も写真入で説明されている)。こうなると、アメリカ文化において碑文が家庭内またはそれ以上のコミュニケーションの役割を担っていることが伺える。

2. 研究方法

アメリカの墓石の両面、または表面をデジタル撮影により収集してその言語内容、記号を分析する。碑文の中には墓石そのものが風化しかけているために、文字や記号の判読が容易でないものがある。その欠点を補うために、600万画素以上のカメラを使用して、コンピュータの画面上で拡大して解読した。ここで、「記号」と記したのはアメリカの墓石にはことばのみが刻まれるのではなく、記号も多く記されているからだ。写真1には、郵便局の記号が記されていることが分かる。写真2ではライフルがあり趣味としての狩猟、写真3では、フィッシングの絵が刻まれている。しかし、研究ノート(1)では言語記号のみを扱う。「両面、または表面」としたのはアメリカの墓石は一般的には tombstone と称されるが、その形は様々である。写真4は head stone と称され、写真5は marker である。何れも観察可能な部分は表面である。しかし、

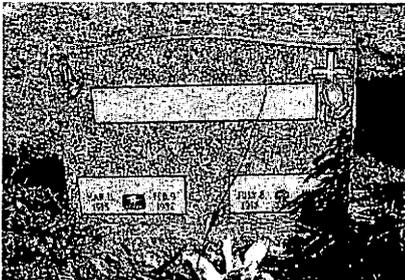


写真1

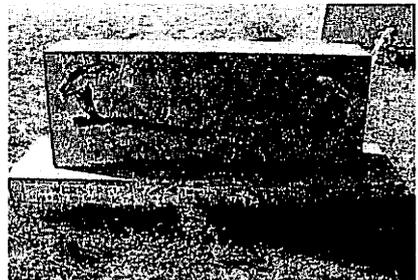


写真2

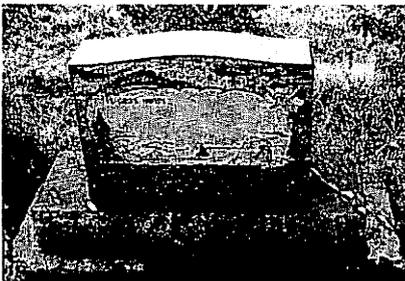


写真3

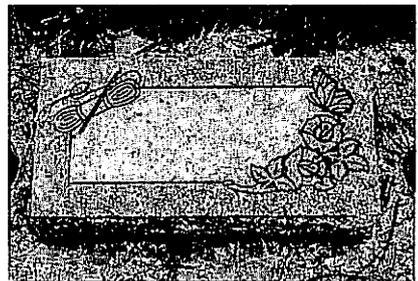


写真4

写真6は地面から隆起しており、両面を観察することができる。多面観察可能な例として、写真7、8を挙げたが他にも様々な形がある。しかし、本研究ノートの趣旨とは異なるため割愛した。

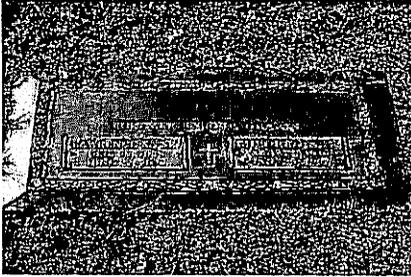


写真5

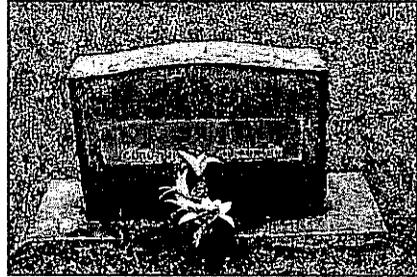


写真6

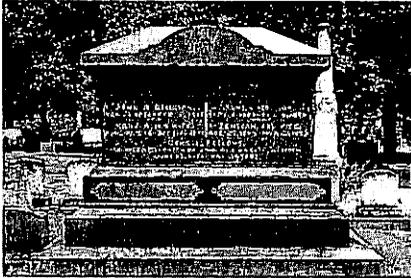


写真7

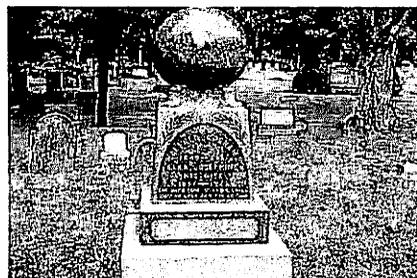


写真8

3. データの分類

手元にあるデータは調査者自身が現地に赴き（13州から約2500点）撮影した鮮明な映像であるが、故人のプライバシーと尊厳に注意すべく名前の一部をコンピュータ処理で不明瞭にして収集場所を伏せることにする。碑文は大別して次の2つに分類される。

- I. 生存者（以下Sと称する）から他界した者（以下D称する）への語り
- II. DからSへの語り

IはSが碑文の内容を考える場合もあるが、定型化されたものの中から選ぶ場合もある。IIはDが遺言として残す場合と定型化されたものを選択する場

合、さらに、SがDにとって最も相応しいと思われるものを選択する場合がある。しかし、この何れの経路にしても碑文がコミュニケーションに関係すること、それがアメリカ文化の一旦を担っていることに相違はない。

3.1. SからDへの語り（写真9、10、11、12）

この分類で最も顕著な例がSはDを忘れない、現在でも思っている、愛しているという語りで、次のような表現である。“always in our hearts,” “too well loved to be forgotten,” “forever in our hearts.”等。この様な語りはいったい何を意味するのだろうか。「Sの心の中にはDが存在する」ということだ。因みにアメリカ人が“love”という言葉を頻繁に使うことで文化全般の浅薄さとして誤解する学習者がいるが、その言葉の文化的意味は碑文から伺える。“love”とは言い尽くせないことばであり、言い続けることによつてのみ意味が保障されるものではないだろうか。写真12は多数ある1例である。これは生



写真9

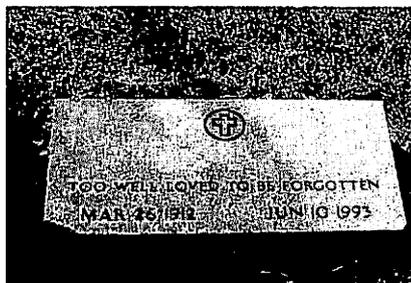


写真10

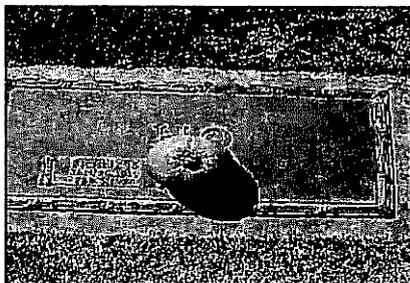


写真11

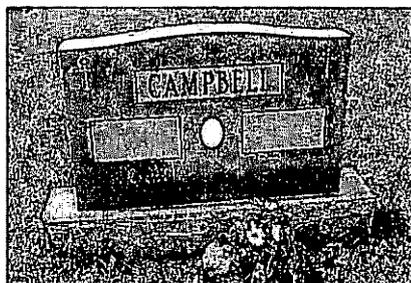


写真12

存者の妻が亡き夫のために建てた墓石と碑文の典型である。

このSからDへの語りとしての碑文は前者が碑文の前でそれを声に出してDと語られることもあるだろう、または黙読で語りかけることもあるだろう。Sが複数人数存在するならば、碑文の内容に沿ってDについて語ることであろう。

3.2. DからSへの語り (写真13, 14, 15, 16)

この分類で最も顕著な例はDがSに対して「微笑みなさい」または「悲しむなかれ」という語りであり、それは次のような表現に見られる。“just passing through,” “gone home,” “I won't be far away”等。この語りはDが「Sの心の中には自身Dが存在する」ことを確信してはいるが、決してSが泣いてDのことを思いだすのではなく微笑みながら思い出して欲しいとの意図が込められているのである。その語りの極みが写真16である。この碑文はD自身(母親)のデザート fudge のレシピが詳しく刻まれている。DのSたちがこのデザート

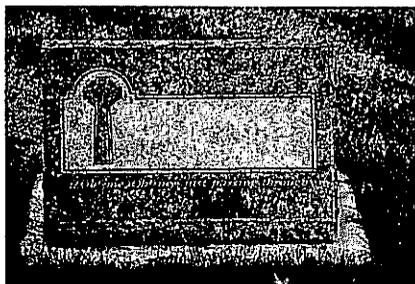


写真13

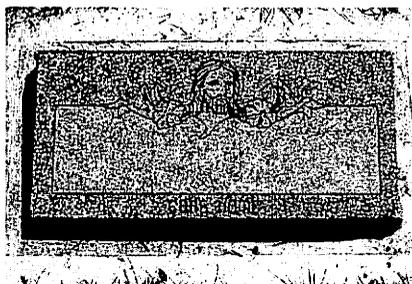


写真14



写真15

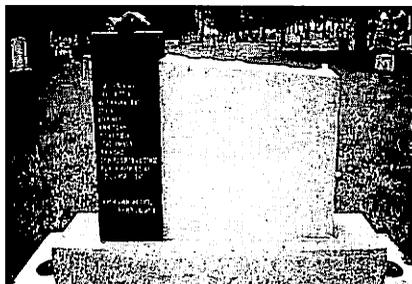


写真16

を食する度に微笑みながらDのことを思い出して欲しいという願いからの語りであろう。レシピの最後には次のようにDを評している。“Wherever she goes, there's laughter.”(Dの行くところ笑いあり)。

SからDへの語りと同じくこの種の語りもSは碑文の内容に沿った話題でDへと語りかけることだろう。

4. まとめと課題

碑文の言語メッセージをⅠとⅡに分けて考察したが、碑文が何れに属しようがその刻まれた内容をSとDの両者がDと生前にしたコミュニケーションを理想化して永続させていると考えられる。さらに、碑文はなにも生前のDと彼/彼女を知るSたち同士の語りのためのみではない。Dの亡き後に生を受ける新しいSへの語りでもある。

異文化コミュニケーション研究・教育はコミュニケーションそのものに異文化性を見出す努力を重ねてきた。本研究はその補足として「物」から異文化性を見出し、それが如何にコミュニケーションと関わっているかを研究するものである。今回の場合その対象を碑文とした。通常、異文化コミュニケーションに従事していても、祈りの場にはない限り我々はSからDへの語り、DからSへの語りの場に居合わせることはない。しかし、多くの文化人類学者が語るとおり、文化は顕在する部分だけではなく、その多くが無意識の底に潜在する。その意識の底を語ることは日常茶飯事にできることではない。語りたくとも語る方法を持ち合わせていない。または、ことばのみによってそれを語ることをしないのが人間ではないだろうか。それがもし真実ならば、ことばのやりとり以外の「物」から異文化コミュニケーションを研究するとする姿勢があってもよい。本研究はその顕在化されない部分の解明の一步である。

本研究はあくまでも研究ノートでしかないが、今後もデータ収集とその分析を継続して碑文とアメリカ文化、コミュニケーションとの関わりを掘り下げて行きたい。

注：本研究の一部は日本比較文化学会（東京、駿河大学）で2006年に口頭発表されたものである。

参考文献

Barnlund, Dean, C. 1982. Public and private self in Japan and the United States. Tokyo: The Simul Press.